

# 小泉八雲を知る旅



## 第1回 生涯を概観してみよう

小泉八雲の生涯を知る資料として、田部隆次著『小泉八雲 ラフカディオ・ヘルン』があります（ハーンでなくヘルンの呼称については、文末の「SIDE STORY」を参照）。[Amazon.co.jp](https://www.amazon.co.jp/): [本](#) これは第1版（1914年）後の第4版（1980年）を文庫化したもので、1990年の改訂版を底本に2025年3月に発行されました。きっと『ばけばけ』ブームを見込んで新装されたのでしょうか。八雲の長男・小泉一雄が自著『父「八雲」を憶う』（オリジナル版発行は1931年）において、「父に関する伝記としてはこれが一番正確なものでしょう。何もかも述べ尽くされているはずですよ」と語っているようで、アマゾンの惹句も「直弟子（高部注：田部隆次のこと）が綴る伝記の決定版」とあります。

別の図書やネット情報もつまみ食いしている私は、面目ないですが、いまだにこの500ページ近い分厚い伝記は読破していません。とはいえ大まかに彼の足跡は掴めているので、まず、3種のAIにその生涯を「である体で400字程度」にまとめてもらいました。八雲は、自分の感性や見識を抛り所に、文章を精魂込めて練磨した表現者。それに、西欧風・ハイカラ風や文明の利器を嫌悪し、日本では汽車は仕方なく利用したことはあるものの電車は一度も乗らなかったという、こだわりの強い人。こんなイージーな試みをする私をきっと苦々しく思うでしょうが、以下は、3つのAIの回答の中から選んだベストなまとめです。

《小泉八雲（パトリック・ラフカディオ・ハーン）は、東西の文化を架橋した稀代の文筆家である。1850年、ギリシャのレフカダ島に生まれ、アイルランドやフランスで多感な少年期を過ごした。若くして視力を一部失うなどの苦難を経験したが、渡米後にジャーナリストとして頭角を現し、鋭敏な感受性と緻密な描写力を磨いた。1890年に来日した彼は、島根県松江で英語教師に就いた。そこで小泉セツと結婚し、日本の伝統的な暮らしや精神性に深く魅了される。後に帰化して「小泉八雲」と名乗り、東京帝国大学などで教鞭を執りながら、日本の怪談や風俗を英語で世界に発信し続けた。彼の代表作『怪談』などは、単なる民話の記録にとどまらない。近代化の波で失われゆく日本の「心の形」を、異邦人の視点と慈しみを持って再構築した文学的結晶である。1904年、激動の生涯を閉じるまで、彼は日本を愛し、その深淵を解き明かそうと筆を振るい続けた。》

過酷すぎる生い立ち、幼年時代。好奇心と行動力と観察力に満ち満ちたアメリカ時代。そして、永住の地となった日本時代。幼くしてトラウマを背負い、孤独と感受性を養い、アメリカでジャーナリスト・作家としての成功と苦汁を味わい、日本に恋して来日。最愛の日本人女性と出会い、家庭を営む幸せを知り、日本にも世界にも名を馳せ、多くの人々に影響を与えた八雲。まさに激動の生涯です。

彼の人のとなりや日本での生活は、青空文庫でも公開されているセツの『思い出の記』で知ることができます。[小泉節子 思い出の記](#)。上述の田部隆次が口述筆記したもので、夫と歩んだ愛おしい人生の記憶が親しみのある口調で語られています。あ、口述筆記する経緯は、ドラマ化されたフィクションの『ばけばけ』とは全く違いますよ。しかし、「ありふれた日常」がやがて素晴らしいものに「化けていく」という、あのドラマの底流にあったものは、この『思い出の記』からイメージーションが広がったのではないのでしょうか。

## SIDE STORY

### ハーンじゃなくて、ヘルンが好き!!

田部隆次著『小泉八雲 ラフカディオ・ヘルン』は、冒頭で次のように述べています。

「ラフカディオ・ヘルンという読み方はもと文部省か島根県の役人の始めたものであろうが、先生はこれを採用し、平がな、万葉がなで多くの印章をつくったりしている。夫人もいつもヘルンと呼んでいた。夫人の話によれば、ハーンと書くあの中の棒が嫌いであったということである。松江時代、熊本時代の教え子たちはヘルン先生のことをハーンと呼ばれては感じがでないという程だから、私もそれに従ってヘルンと呼ぶことにしている。」

つまり、日本人関係者が苗字「Hearn」をローマ字読みして「ヘルン」と読んでしまったというわけです。いや、ローマ字読みでヘルンとは読めないですね。

じつは明治時代の外国人カタカナ表記は、いい加減というか、とてもおおらか(!?) だったので。八雲が日本に渡来するきっかけになった図書『古事記』の訳者であるチェンバレン (Basil Hall Chamberlain) は、チェンベレン、チャンプル、チャンプルレーン、チャムバーレンなどさまざまに表記されたそうです。

ところで、八雲が「ハーン」より「ヘルン」を好んだ理由については、セツの言うように、書き文字として真ん中に一本線という長音の「ー」の空白感が、気に入らなかったのもしれません。また、片目の視力を失っていた彼は聴覚がかなり冴えていたようなので、音の響きも「ヘルン」の方が好ましかったののかもしれません。どちらであれ、そこには彼特有の感性と美意識が感じられます。

さらに、ハーン家の紋章がアオサギ (hearn=ヘルン) だったことも理由のようです。ゆくゆくは日本に帰化するとはいえ、自分の生まれという郷愁めいたアイデンティティは、生涯手放すことはなかったということではないのでしょうか。